

造形的な創造活動にみられる子どもの学びの過程

高木 三智子（上越教育大学学部）

要 約

造形的な創造活動において、子どもたちの相互行為による表現が重視されている。そこで、一人学びから相互に関わり合う学びへと変容していく過程に注目する必要がある。本研究では、図画工作の絵画制作の場面において、一人学びをしている児童Yに注目し、一人学びから相互に関わり合う学びへと変容するきっかけを明らかにすることを目的とし、参与観察を実施した。

Yの学びの過程を分析した結果、活動時に賞賛や助言をもらう相手が、教師から友達へと変化していたことが分かった。このことから、一人学びから相互に関わり合う学びへと変わる主なきっかけは、友達からの積極的な関わりであることが明らかになった。

〔キーワード〕 一人学び 相互に関わり合う学び 絵画制作 積極的な関わり

研究の背景と目的

近年、造形的な創造活動において、子どもたちの相互行為による表現が重視されている。学習指導要領図画工作編では、「感じ方や見方は、物や人との様々な関係を積み上げることで深められ、一人一人の持ち味を生かした感覚や感性を高めることになる。」と示されている¹⁾。また、新潟大学教育学部附属長岡中学校は「授業中に行われるごく自然な交流を組織化し、積極的に造形し思考しあう場面や手立てを設けて、相互に学び合い、その良さを実感させることができれば、一人一人のやる気を助長し、自信のあるより豊かな表現を期待できる。」と述べている²⁾。多くの子どもが、他者と関わりながら学ぶ中で、一人学びの子どもも存在する。一人学びは、自己の制作活動に没頭できるが、他者の表現の良さに触れる機会を見逃す恐れがある。池田(2001)は、低学年の子どもの学びにおいて「他者理解の芽生えがこの時期に急速に発達する」と述べている³⁾。

そこで、本研究では、一人学びをしている児童に注目し、学びの過程を分析することを通し、一人学びから相互に関わり合う学びへと変容するきっかけを明らかにすることを目的とする。

研究の方法

(1) 調査対象

新潟県公立小学校 児童Y（2～3年生）

Yの特徴：絵画制作が大好きで、Yは自らの活動に没頭する時間が長い。作品に対する愛着も顕著である。

(2) 調査期間

2003年1～2月、4～5月、10～11月

(3) 調査単元

2～3年：図画工作・絵画活動

(4) 調査手続き

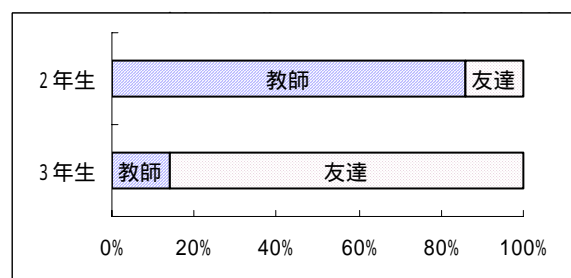
- ・VTR・CTR・ICR：Yの音声映像を記録
- ・図画工作学習に対するアンケート及び自由記述によるアンケート調査

結果と考察

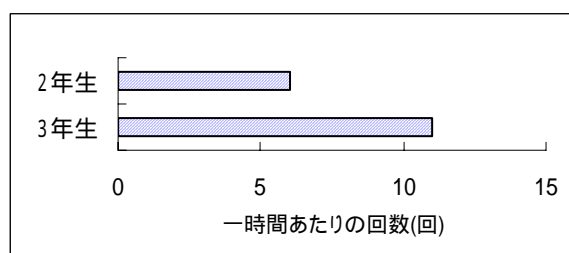
(1) Yの行動の変容

会話・行動分析により、自分の作品を見せる相手が、教師から友達に変容した【図1】。

また、3年生になり、自ら友達の作品を見る回数が増えた【図2】。



【図1 Yが自分の作品を見せる相手の変容】



【図2 Yが友達の作品を見る回数の変容】

(2) Y自身の学びの様相

1) 2年生のY

自己の制作活動に没頭し、他者と関わる機会が少ない。一人で没頭し、連続して制作する時間は非常に長い。関わる相手は、教師が多く、評価や賞賛を求める時に見られる。友達との関わりは、道具の貸し借り時、道具の準備や片付け時、質問される時に見られる。

2) 3年生のY

一人で没頭し、連続して制作する時間は、2年生に比べ短い。残りの時間は、制作に関する内容で友達と関わっている。自らの教師への関わりは、進行や道具の使用に関する許可と作品の提出時である。関わる他者のほとんどは、教師ではなく、友達である。関わりの内容については、自分の作品を見られる時、友達の作品を見てコメントする時、友達の作品制作を手伝う時、道具の貸し借りの時、道具の準備や片付け時に見られる。

以下にY自身が他者の表現の良さに気づき、友達の作品に積極的に関わっている事例を挙げる。

友達の作品を賞賛する具体的場面

< Y...本人, A・B...Yの友達 >

A: できた～。疲れた～。

Y: でもいいよね。(Aの作品を指差しながら,)
こういうスプレーみたいなのやつ。

B: ペイントのスプレーみたいだね。

Y: あーパソコンのね。(自分の制作に戻る。)

(3) 他者から得られるYの学びの様相

1) 2年生のY

情報を求められる場面

教師が、Yの作品を全員の前で賞賛することにより、間接的にYの作品を参考にする児童も多い。中には、Yに直接尋ねる児童も存在する。その典型的な会話の例は、「それ、どうやるの?」といった技法を尋ねるものである。しかし、Yは自己の学びに没頭しているため、不明瞭な回答をしている。

2) 3年生のY

次に挙げる児童A・Bは、Yの作品への賞賛や助言、さらにYの作品の良さを他の友達に広めるなど、積極的な関わりをしている。以下に、Yが友達から賞賛されている事例を挙げる。

Yの作品を賞賛する具体的場面

< Y...本人, A・B・K...Yの友達 >

A: うめえじゃん。(モデルの)Kちゃんらしい。

Y: あと、適当だ。(少し微笑む。)

B: Y,先輩だぁ。

A・Bが立ち去ってから・・・

Y: よし。Kちゃんらしくなってきたぞ。

(書き直しながら,)こっこのほうがいいな。

以上、Yが得られた友達の直接的、積極的な関わりにより、自分の作品を捉え直しているつづやきが見られる。

(4) 考察

Yは自分の作品を賞賛されたことをきっかけとし、友達の制作活動に積極的に関わっている様子が見られる。また、友達の積極的な関わりが、Yの活動意欲を促進する要因になったと考えられる。

結論

児童Yの学びは、低学年では没頭する一人学びであるが、中学年では友達と互いの制作活動を認め合う学びに変容した。つまり、一人学びから相互に関わり合う学びへと変わる主なきっかけは、友達からの積極的な関わりである。

今後の課題

造形的な創造活動において、Yが友達の作品を見る行動も、相互に関わり合う学びへと変わった要因の一つとして考えられる。そこで、鑑賞という視点から、Yの学びを分析する。

また、相互に関わり合う学びにおいて、授業者である教師が配慮すべき点を明らかにする。

[引用文献]

- 1) 小学校学習指導要領解説図画工作編, p23, 文部省, 平成11年5月
- 2) 新潟大学教育学部附属長岡中学校:『学び合う生徒を育てる。対話のある授業・活動の組織・展開』, p92 - 93, 明治図書, 1987
- 3) 池田仁人:「生活科における科学的な気づきの発現と意味に関する研究」, p36 - 38, 上越教育大学修士論文, 2001